

潮流

ケインズ理論への新しい視点

ケインズの時代は過ぎ去ったといわれて久しいが、本国イギリスでの浩瀚な著作集30巻の完成、関連諸文書の公開を踏まえて、わが国でも新しい観点からの研究が深化している。特に、最近の金融市場のグローバル化の進展という状況に対して、ケインズの理論に依拠した注目すべき論考が見られるようになった。

そのひとつは、昨年秋に刊行された岩本武和著『ケインズと世界経済』である。この本は、これまでケインズ経済学の中でも比較的等閑視されてきた国際経済学の分野を取り上げ、ケインズが「時間の相の下に」書き上げた時論を詳細に分析することにより、キーカレンシーの交替という大変動時代に遭遇したケインズが、当時のグローバル化の動きに対応してどのような国際的措置を構想していたかを明らかにしているものである。同書によれば、ケインズの主張の本旨は、「自由放任の終焉 国家的自給の思想 重商主義への共感」という論理展開と、それに付随する「自由な国際資本移動」の規制と重商主義の弊害を避けるための「国際的ケインズ主義の採用」の提案であったという。そしてそこで見出されたケインズのグローバル化への批判的視点は、今日の状況に対しても普遍的妥当性をもつものとされており、肯けるところが多い。

また、同書が詳細に取り上げたケインズの一つの時論 1933年夏の論文「国家的自給」で、ケインズが国民経済擁護の立場にたって、金融と並んで農業を取り上げ、そこで「農業の追求は完全な国民生活の一部である」として自給の思想に言及していることは、今もなお示唆に富むものだとの感が深い。

つづいては、この春刊行された岩井克人著『二十一世紀の資本主義論』であるが、同名の巻頭論文は、「グローバル市場経済の危機」という副題を持つことから明らかなように、現在の金融市場の危機的状況から論を起し、新しい世紀の資本主義の行方を占っているものである。そこでは、世紀末に起こった諸金融危機は投機に起因するものであること、また貨幣の本質論からして市場経済にとっては投機が最も根源的な活動であることを踏まえ、今日グローバルに展開するにいたった金融市場は、新しい世紀においても引き続き投機活動によって危機を繰り返すことになると推論し、グローバルな市場経済全体はキーカレンシーたるドル危機に直面することとなるという予測を行っている。そして、流麗な文章による説得的なこの論文においても、その論理の展開の礎石として置かれているのが、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』第4編第12章Vの美人コンテストのメタファーなのである。

同書は、ケインズの豊富な投機経験に裏うちされたこの「美人コンテストの原理」から、市場には本来的に不安定性がつきまとうことを主張する理論を読み取って、そこから新しい世紀の資本主義の将来を描いて見せてくれている。これは現在のグローバル化の下で展開される金融の本質を探る上でのケインズ学説の新しい援用であり、これまた示唆に富むものと思われたのである。

(理事長 浜口 義曠)